

大江以言の「詩境」

田 中 理 子

はじめに

大江以言（九五五―一〇一〇）は、平安中期に活躍した詩人である。その詩文は『和漢朗詠集』や『新撰朗詠集』に摘句されており、名の知られた詩人であることわかる。同時代人からの評価を知る資料としては『和漢朗詠集』や『本朝麗藻』がある。その後に編まれた『本朝文粹』や『江談抄』にも以言の作は多く、『新撰朗詠集』には本朝の詩人で最多の詩が入選しており後世からの評価も高い。しかし、その以言については後藤昭雄氏や田中進一氏の論を見るばかりであり、彼の詩語についてはほとんど議論されていない。

そこで本稿では、『和漢朗詠集』九月尽部に収められている以言の「秋未出詩境」詩の題にある「詩境」という語について論じる。この「詩境」は白詩に用例がみられる語であるが、以言の詩題のそれとは異なる。以言がこの「詩境」の語をどのように受け取って自らの作品に利用したのかを考察するとともに、後世へどのような影響を与えたのかを考える。

一、大江以言と大江匡房

本朝における「詩境」の使用で著名なものに大江匡房（一〇四一―一一一一）の「詩境記」がある。「詩境記」については後藤昭雄氏の論が詳しく、

「詩境」は、この「記」では「境」の字義に引きつけて、一つの空間、国として仮構されている。このような心的なはたらきを一つの空間に置き換えるというこの「記」の発想、結構は、「詩境記」というその題とともに、初唐の王績の「醉郷記」に倣うものである。⁽²⁾

と、述べておられる。右の「仮構」された「空間」を本稿では「仮想空間」と呼ぶことにする。この仮想空間の「詩境」について考察するには、「醉郷記」を見る必要がある。以下に「醉郷記」および「詩境記」の冒頭部を載せる。

醉郷記⁽³⁾

王績

醉之郷、去中国不知其幾千里也。其土曠然無涯、無丘陵阪險。其氣和平一揆、無晦明寒暑。其俗大同、無邑居聚落。其人甚精、無愛憎喜怒。吸風飲露、不食五穀。其寢于于、其行徐徐。与鳥獸魚鱉雜處、不知有舟車械器之用。（後略）

醉の郷は、中国を去ること其の幾千里なるかを知らざるなり。其の土は曠然として涯無く、丘陵阪險無し。其の気は和平一揆にして、晦明寒暑無し。其の俗は大同にして、邑居聚落無し。其の人は甚だ精にして、愛憎喜怒無し。風を吸ひ露を飲み、五穀を食らはず。其の寢は于于として、其の行は徐徐たり。鳥獸魚鱉と雜はり処り、舟車械器の用有るを知らず。（後略）

酔っぱらいの国だという「酔郷」は、この世界からどれほど遠いところか分からない。そこには果てがなく、丘や険

しい山の無い景色が広がっている。その地の気候はいつも穏やかで、夜も昼もなく、寒さや暑さは感じない。そして、どこにも人の住む集落はない。「酔郷」の人々には愛憎も喜怒はなく、みな風を吸い露を飲み、五穀は口にしない。人々はゆつくりと眠り、ゆつたりと過ごしている。そこには鳥獸や魚や鼈（すっぽん）が集まる。その地へ行くのに舟や車を用いる必要はなく、ただ、酒に酔えばよいのである。

詩境記

大江匡房

夫詩境、無水土山川、無人民戸邑。又不知在何方面。警然而至、倏忽而往。至其佳境、難中之難也。以翰墨為場、以感傷為俗。花月輪租稅、煙霞代封祿。（後略）

夫れ詩境は、水土山川無く、人民戸邑無し。又何れの方面に在るかを知らず、警然として至り、倏忽として往く。其の佳境に至るは、難中の難なり。翰墨を以て場と為し、感傷を以て俗と為す。花月を租税に輪し、煙霞を封祿に代ふ。（後略）

「詩境」というところには、水の流れる川や土でできた山は無く、人も住んでいない。「詩境」はどこに有るのかも分からない国であるが、ちらりと心に浮かんだ時に突然到達することができる場所である。「詩境」へ行くのは難中の難である。「詩境」へ行くには、心の動くままに詩を詠む必要がある。そのため、その地では花月や煙霞といった詩興を起す自然の景物が租税であり、封祿なのである。

後藤氏は、「詩境記」の構文が「酔郷記」に依っていることを示す。「詩境記」の「無水土山川、無人民戸邑。又不知在何方面。」の構文は「無」、無、（又）不知」で、「酔郷記」の「去中国不知其幾千里也。其土曠然無涯、無丘陵阪險。」に倣っているという。

更に、構文だけでなく、「詩境記」の発想も「醉郷記」に依るものであるという。「詩境記」の「以翰墨為場」とは、詩を詠むことよって「詩境」という仮想空間に至ることを言う。これは酒を飲むことよって「醉郷」に到達する。ことができないという「醉郷記」の発想と同じである。

以言の「秋未出詩境」について、『江談抄』〔四一八九〕⁽⁴⁾に、以下の記述がある。

文峰案^レ贊白駒影 詞海巖^レ舟紅葉声 秋未^レ出^レ詩境。以言。

以言初作^三駒過影落葉声^二云々。六条宮見^レ草、被^レ書^三白字肝要之由^一。仍改作云々。以言与^三斉名被^三相試^二一日、承作云々。斉名常以為^レ愁。称曰、最手片廻、何謀計云々。斉名臨終、宮被^レ訪。報命、恩旨恐悚千廻、但白字事不^三忘却^二云々。又大府卿談曰、件題、斉名作、霜花後乘詞林裏、風葉前駟筆駟程。至^三于下七字^一、風之駟^レ葉步^三前駟^二之義、尤有^レ興、霜花後乘、甚以無^レ由。彼時斉名云、以言詩、白駒之白字、六条宮不^レ令^レ直者、劣^三於我詩^二久。而件詩、雖^レ不^レ直^三紅白二字^一、案巖四字吉^レ尽^二題意^一。未^レ出^レ之心籠^三此義之中^一。然則可^レ謂^レ勝^三斉名霜花之句^一、歎云々。或人問云、但不^レ直^レ字者、駒過影落葉声三字、讀甚以碎歎。答云、無^三白字^二者、非^三只讀碎^一、上句無^三秋心^二歎。白駒者秋也。白字直千金也。

以言は初め「白駒影」を「駒過影」、「紅葉声」を「落葉声」としていた。しかし、六条宮に「白」の字を用いるのが肝心だと言われて改作した。それにより以言は及第し、一緒に受けた紀斉名は落ちた。その後斉名は臨終の際に、見舞いに来た六条宮に感謝しつつも、白の字のことは忘れないと言ったという。『江談抄』には、白の字が無ければ上の句に秋を表すものが無くなってしまうおもしろみに欠けるため、白の字は値千金だと書かれている。「白」の字がこの詩のポイントであるように見える。しかし、大府卿つまり匡房は改作前でも「案巖兩字吉^レ尽^二題意^一」と評しており、匡房は

「案」と「驥」の字が重要だと述べている。匡房はこの詩題をどう考え、以言の詩を評価したのだろうか。問題の以言の作の前に、同じ題で詠まれた斉名の作を見る。

霜花後乗詞林裏
風葉前駟筆駟程

霜花は後乗す詞林の裏
風葉は前駟す筆駟の程

秋が去ってその後を追うように霜が降り、秋が去る先駆けとして落葉は風に舞う。

季節が道を行き帰るといふ発想は、平安朝の詩歌によく詠まれている。その際、斉名の作にある「駟」や、道に関わる「関」や「城」など道に関わる語の使用が目立つ⁵⁾。斉名の作は秋の終わりに生じる惜秋の想いを「詩境」として、秋が去っていく寂しさを詠んでいる。先行する発想は『和漢朗詠集』三月尽・九月尽部にも見える⁶⁾。

ここで注目するのは、匡房は「風葉前駟」を「以有興」と賞賛しているが、「霜花後乗」については「甚以無由」と述べている点である。「詩境」を「詩境記」的に捉えると、「霜花後乗」は秋が「詩境」という仮想空間から去った様子を表しており、詩題に沿わないということになる。

次に以言の作を見る。「秋未出詩境」詩は『和漢朗詠集』九月尽部にも採られている。

秋未出詩境 (二九六)⁷⁾ 大江以言

文峰案轡白駒景 文峰に轡を案す白駒の景

秋の陽ざしは九月尽の山を越えようとして秋の最後という今日の一日を、詩才にたけた人々が集まる峰に、轡を押さえて馬の歩みを留めてくれている。秋の紅葉を吹く風の音も、今や海の彼方へ舟出していこうとして、文章の土が集う海辺に、今日を限りの秋風を響かせながら舟よそおいをしていることだ。

『江談抄』で値千金だと言われた白は、五行説で秋を示す色である。この句は、秋の日の光を表す「白駒景」と、紅葉を揺らす風の音である「紅葉声」によって色対がなされている。

しかし、匡房の意見によると「案」「艤」の字は詩題の意をよく示しているという。この詩では秋は詩題の「詩境」に留まっている。その「詩境」には「文峰」や「詞海」といった文章にまつわる景色が広がっている。文峰や詞海のような現実ではない仮想の世界において、秋は擬人化され、九月尽日を惜しむために「詩境」に留まっているのである。このような仮想空間を描く「詩境」は匡房の「詩境記」の発想とよく似ている。

しかし、「詩境」は匡房以前の作にも見える語で、後藤氏も匡房に先行する「詩境」の語の使用例として『江談抄』や『侍臣詩会』の詩句を挙げているように、匡房以前の「詩境」の語についても考える必要がある。

仮想空間を描くのに「酔郷記」を利用したのは匡房にはじまることではない。後藤氏前掲論文や新聞一美氏によると「酔郷記」はすでに道真の詩に用いられている。⁽⁸⁾

この惜春の想いを詠んだ詩は『和漢朗詠集』三月尽の部に採られている。道真の「送春」詩は、「酔郷記」の「酔郷」のような風景は描かれてはいないが、もし春が別れを惜しむなら、と仮想している。その仮想を、より「酔郷記」的に深めたものが以言の「秋未出詩境」詩である。その「詩境」には「文峰」や「詞海」といった仮想の風景が広がってお

り、そこに人に仮想された秋が留まっているのである。

匡房は以言の「秋未出詩境」詩を、仮想空間の「詩境」を詠んだ詩で、そこに留まる秋を詠んだ詩と捉えた。その匡房は「詩境」を仮想空間に見立て「詩境記」を記している。これは「詩境記」が「醉郷記」に倣ったというだけでなく、以言が詠んだ仮想空間の「詩境」の発想も利用したと考えられる。

二 「詩境」の語の展開

本章では「詩境」を三つに分類してその語を論じる。

(一) 詩を作りたくなる「詩境」

平安朝の詩人にとつての「詩境」という語のイメージに大きな影響を与えた詩人として筆頭に挙げられるのは白居易である。白居易は「詩境」という語を、詩を作りたくなる気持ちとして用いている。その例は二例ある。一つは「秋池二首」の其二である。

秋池二首 其一〔2275〕⁽⁹⁾ 白居易

身閑無所為 心閑無所思

身は閑にして為す所無く、心閑にして思ふ所無し

況当故園夜 復此新秋池

況んや故園の夜に当たるをや、また此の新秋の池

岸暗鳥棲後 橋明月出時

岸暗く鳥棲みし後、橋明らかにして月出でし時

菱風香散漫 桂露光参差

菱風香り散漫し、桂露光参差たり

静境多独得 幽懷竟誰知

静境多く独り得、幽懷竟に誰か知らん

悠然心中語 自問来何遲

悠然たり心中の語、自ら問ふ来ること何ぞ遅きやと

身は閑で何もすることはなく、心も閑で思うこともない。特に故園の夜の、特に秋になったばかりの池のほとりはおさらだ。岸辺が暗くなり鳥がねぐらに帰った後、月が上つて橋を明るく照らす頃。風は菱の香を運び、桂の葉に置く露がちらちらと輝く。こうした静かな境地は大抵一人ぼっちの時に得られるものだから、この私の静かな心は誰も知らない。ゆったりと落ち着いた気持ちでいると心の中の言葉が聞こえる。どうしてもっと早くここに来なかつたのだろうか。

其二〔2276〕

白居易

朝衣薄且健 晚簟清仍滑

朝衣薄くして且つ健、晩簟清く仍ほ滑かなり

社近燕影稀 雨余蝉声歇

社近く燕影稀に、雨余蝉声歇む

閑中得詩境 此境幽難説

閑中に詩境を得、此の境幽にして説き難し

露荷珠自傾 風竹玉相憂

露荷珠自ら傾き、風竹玉相憂す

誰能一同宿 共翫新秋月

誰か能く一たび同じく宿し、共に新秋の月を翫ばん

暑退早涼帰 池辺好時節

暑退きて早涼帰り、池辺好き時節なり

朝の衣は薄くて体は健やか、夕べの椅子は清らかで滑らかである。社の近くには燕の姿もめつたに見えず、雨あがり蝉の声も止んでいる。閑中で詩を作りたくなるような境地に至ったが、それは深遠な幽の境地であり表現できない。露の珠はおのずと傾き、風に揺れる竹の玉のような音も響いている。誰と一緒にここに宿り、秋になったばかりの月を

愛でるのだろうか、暑さが退いて涼しさが帰ってきたこの池のよい時節に。

「静境」はそもそも一人ぼっちの時に得られるものだからこそ、「幽境」は誰も知りようがないと白居易はいう。「静境」も「幽境」も「身閑無所為、心閑無所思」で故園の夜を楽しんで得たものである。「其二」では閑の中に「詩境」を得ており、静かな場所や自らが閑であることが詩を作る気持ちを引き起こすと表現している。

白詩の影響を大きく受けている作として菅原道真の「秋雨」詩が挙げられる。ただしこの詩には「詩境」の語はみえない。しかし、先の二首と同じく「閑」の中で詩を作りたい気持ちが生じている。

秋雨〔二七〇〕^⑩

菅原道真

秋霖晴日少 旅館感懷多

秋霖に晴日少し、旅館に感懷多し

屋見苔侵壁 池間水溢科

屋は苔の壁を侵すことを見、池は水の科に溢るることを聞く

苦情唯客夢 閑境併詩魔

苦なる情は唯だ客の夢にして、閑境は詩魔を併はず

帯雨年華落 其如我老何

雨を帯びて年華落ち、其れ我が老いを如何にせむ

秋の長雨で晴れの日は少なく、ことに旅の宿りでもの思いにふけりがちである。壁は苔で覆われ、池の水はくぼみを浸して溢れ出る音を立てている。苦しい気持ちはただ旅の夢で、この閑かな境地は詩への衝動をかき立てる。雨が降って花が落ちるように一年が終わる、私自身も老いていくのをどうしようもない。

道真は詩を作りたい気持ちを表すのに「詩魔」という語を用いた。この語は白詩に見える語で、新聞氏が説かれるように白居易の詩人意識を道真が受け継いだものである。例えば、「閑吟」詩ではすばらしい景色によって詩を作りたいという気持ちを「詩魔」と表現している。

閑吟〔1004〕⁽¹²⁾

白居易

自従苦学空門法 苦に空門の法を学びて自従り

銷尽平生種種心 銷し尽す平生種種の心

唯有詩魔降未得 唯だ詩魔有りて降すこと未だ得ず

每逢風月一閑吟 風月に逢ふ毎に一たび閑吟す

仏教を学んで以来日常の様々な想いを消すことができなくなった。しかし詩魔だけは降伏させることはできずにいて、すばらしい景色や景物に逢うと詩を作りたくなるという。

詩魔とは詩を作りたくなる気持ちを表し、この「閑吟」詩では、白居易は風月、つまり素晴らしい風景によって詩を作りたい気持ちを起こしている。「秋池二首」では「閑」であることが詩を作りたい気持ちにさせていた。しかし、「閑吟」詩はすばらしい景色が詩を作る気を起こさせている。「閑吟」詩のようにすばらしい景色によって詩を作る気持ち
が起きることを白居易は「遇境」という。

閑夕〔2305〕

白居易

一声早蝉発 数点新蛩度 一声早蝉発し、数点新蛩度る

蘭缸耿無烟 筠簟清有露 蘭缸耿として烟無く、筠簟清くして露有り

未帰後房寝 且下前軒歩 未だ後房に帰り寝ねずして、且く前軒を下りて歩む

斜月入低廊 涼風満高樹 斜月低き廊に入り、涼風高樹に満つ

放懷常自適 遇境多成趣 懷ひを放にして常に自適し、境に遇ひて多く趣を成す

何法使之然 心中無細故 何の法か之をして然らしむる、心中細故無し

他に先だつて蟬が一匹だけ鳴き、螢も数匹だけが飛んでいる。立派な火灯には灯りはなく、竹の筵は清らかで露が降りている。まだ寢室に帰らず、一人で廊下を歩く。斜めにかかった月の光は廊下に差し、涼しい風は庭の高い木に吹く。心を解放してここの赴くままに楽しむと、詩趣が沸くのである。どうしてそのような境地に至るのか、細かい理由は思いつかない。

「放懷常自適、遇境多成趣」は、藤井良雄氏の注に「心の赴くままに常に悠々自適し、美しい境地に会えば興趣が沸き詩をつくることが多い。」¹³とあり、「遇境」とは詩を作る気持ちを起こす場所に会うことを指す。

「詩魔」と同様に「遇境」も白居易の詩から取り入れた道真は、八月十五夜に「詩人遇境感何勝（詩人境に遇ひて感何ぞ勝へむ）」¹⁴と言っている。白居易や道真の「境」は景色のよい場所や八月十五夜など詩を作りたくなる状況を示す。そのような境遇が詩を作る気を起させ、心境としての詩境表現が生まれたのであろう。更に以言も、詩を作りたくなる気持ちを「遇境方知未飽心（境に遇ひて方に知る未だ飽かざる心を）」¹⁵と詠んでおり「遇境」の語を受け継いでいる。

白居易の「詩境」のもう一つの使用例は次の詩である。

将至東都先寄令狐留守¹⁶ 白居易

将に東都に至らんとして先づ令狐留守に寄す

黄鳥無声葉滿枝

黄鳥声無くして葉枝に満ち

閑吟想到洛城時

閑吟の想ひ洛城の時に到る

惜逢金谷三春尽

金谷の三春尽くるに逢ふを惜しみ

恨拜銅樓一月遲

銅樓に一月遅く拜するを恨む

詩境。忽來還自得

詩境忽ち來つて還自得す

醉郷潛去與誰期

醉郷潛に去つて誰と期せん

東都添箇狂賓客

東都箇の狂賓客を添へ

先報壺觴風月知

先づ壺觴風月に報じて知らしむ

鶯の声がしなくなり、花が散つて枝は葉で満ちている。詩を作りたいという想いは洛陽の春去る時に極まる。洛陽の春が終わってしまったのを惜しみ、ここへ来るのがひと月遅かったことを恨む。このような春が今まさに尽きようとしている状況において、詩を作りたいという気持ちがまたやってきて、それで詩を作るのである。自分は醉郷から去ったが、また洛陽で誰かと醉郷に入りたい。洛陽はこの私という賓客を加えるのであるから、まず酒壺と盃、すばらしい景色に予告しておこう。

ただ美しい景色や詩を作るのにふさわしい環境があるだけでは「詩境」は成立しない。春の景色が美しい東都（洛陽）に、詩人である白居易が来ることが「詩境」を成立させている。「詩境」とは「自得」するもの、自らの気持ちによって手に入れるものである。主観的にみるとこの「詩境」は自分の気持ちを表した言葉である。しかし、美しい景色や詞を作るのにふさわしい環境といった自分の周囲の状況によって「詩境」は生じている。つまり、詩人とその詩人に詩を作りたくなる気持ちを起こさせる環境が揃うことで「詩境」が生まれるのである。

今までの表現と同じ詩を作りたくなる気持ちを表すのに以言も「詩境」を用いている。

七言暮秋陪左相府宇治別業即事。（『本朝文粹』二二七〇）¹⁷ 大江以言

雍州上腴、洛城南面、有一勝境。蓋乃左相府之別業矣。（中略）于時九月更閏一月。一月亦過二旬。仍命一日之飲會。以契

万歳之佳期。遂発詩境之中懷。以為政途之先導。魚虫草木之興。普挾天下之風情。下誠上達之謀。尽察人間之露胆。(後略)

雍州の上臆、洛城の南面に一の勝境有り。蓋し乃ち左相府の別業なり。(中略)時に九月更に一月を聞し、一月も亦た二句を過ぎたり。仍りて一日の歛会を命じ、以て万歳の佳期を契る。遂に詩境の中懷を發し、以て政途の先導と為す。魚虫草木の興、普く天下の風情を挾び、下誠上達の謀、尽く人間の露胆を察す。(後略)

寛弘元(一〇〇四)年閏九月に藤原道長の宇治の別荘で行われた詩会において、以言は道長の別荘の景色を讚え、そこで「遂発詩境之中懷」と述べている。「中懷」は白詩に多く心中を表す語としてみえ、ここは白詩と同じく心の問題である。詩興を起こす場所として、閑・静・幽などの語で表されるしずかな詩境と、すばらしい景色や詩を作るのにふさわしい状況の詩境の二つの例をみたが、どちらもその「境」によって詩を作りたいという気持ちが起きている。

(二) 文場としての「詩境」

白居易の「秋池二首」や道真の「秋雨」では「閑」である状況が「詩境」を成立させていた。閑境としての「詩境」は独りであるときに成立しやすい。しかし、文場としての「詩境」は詩人が多く集まる場、つまり詩会を示す。

以下の詩は長らく詩会が開かれずにいたことを大江朝綱が詠んだものである。

停九月宴十月行詔、与号残菊宴(『本朝文粹』(四六))

大江朝綱

(前略)爰洛水春遊、昔日閣筆。商廳秋宴、今時卷筵。鹿鳴再停、人心不樂。詞人才子、漸吞吟詠之声。詩境文場、已為寂寞之地。(後略)

(前略)爰に洛水の春の遊び、昔日は筆を閑く。商廳の秋の宴、今時は筵を巻く。鹿鳴再び停めて、人心楽まず。詞人才子、漸く吟詠の声を呑む。詩境文場、已に寂寞の地と為る。(後略)

三月の曲水の宴が開かれていたのは昔のことだ。九月九日の重陽の宴も今は開かれなくなった。一年の宴会は再び廃され、楽しみはなくなってしまった。詩人たちは詩の吟詠を止め、それによって「詩境」は寂寞の地となってしまった。ここでの「詞人」と「才子」はどちらも優れた詩人を表し、意味の同じ語を重ねている。その対句では「詩境文場」とあり、「文場」は詩人たちが集まる場、「詩境」は詩心を持つ詩人がいて、その場に集まった者たちに詩を作りたくする気持ちを起こさせる場である。曲水の宴や重陽の宴には詩作は欠かせない。つまり、それ自身が「文場」であり「詩境」であるといえる。

朝綱と同じように、順も「復雖有良宴嘉会、而座無其人、詩境寂寞(復た良宴嘉宴有りと雖も、座に其の人無きは、詩境寂寞たり)¹⁸」と詩人のいない「詩境」を「寂寞」と言っている。すばらしい宴が開かれても、そこに詩心を持った詩人たちがいなければ「詩境」はもの寂しい場所なのである。「詩境」というのは詩会を指すが、それだけではなくその場に詩人たちが集まるのが重要なのである。

朝綱が詠んだのは詩人のいない寂しい「詩境」だけではない。朝綱は宇多法皇の命に依えて「雖嗜水月之観、未抛煙霞之賞。故召風人於翰林、翫客葉於詩境(水月の観を嗜みたまふと雖も、未だ煙霞の賞を抛ちたまはず。故に風人を翰林に召し、客葉を詩境に翫ぶ)¹⁹」と詠んでいる。位を去って仏教に帰した宇多法皇は仏道修行をしながらも、すばらしい景色を見ると詩を作る気持ちは捨て去ることができない。だから詩人たちを招いて詩会を執り行い、そこへやってき

た紅葉を客として愛でるのである。

詩会を示す「詩境」は、寛弘二（一〇〇五）年五月に藤原道長邸で行われた詩会で源則忠が詠んでいる。この詩会には以言も参加していて、その詩は『本朝麗藻』に収められている。この時「夏日同賦未飽風月思」という題で、藤原伊周・藤原公任・則忠・以言・藤原為時がそれぞれ詩を詠んだ。

「夏日同賦未飽風月思」詩は『本朝麗藻』巻下・詩部に載る。以下にその詩と作者を挙げる。⁽²⁰⁾

儀同三司（藤原伊周）（一一一〇）

風月結交非古今、相思未飽每年心。感時無止吹花色、逢友応求出霧陰。

文路春行看不足、詞江秋望老弥深。美哉丞相優遊趣、詩酒興中聞法音。

左金吾（藤原公任）（一一一一）

何事詞人未飽心、嘲風哂月思弥深。嗜殊滋味吹花色、滴似調飢落水陰。

翰墨難乾蘋末浪、襟懷常繫桂花岑。一時過境無俗物、莫道醺々漫醉吟。

源三品則忠（源則忠）（一一一二）

風月自通幾客心、相携未飽思尤深。文場猶嗜照窓影、詩境更耽過竹音。

幽谷春遊誰作足、此時独恨無才用。高楼夜宴久難吟、其奈抽簪入暮林。

江以言（大江以言）（一一一三）

由来風月思沈々、遇境方知未飽心。到老恨遺朝不倦、逐時癖在弄弥深。

起家望德清明影、嗜道猶求吹筍音。偶奉翹材東閣道、長誇古跡自伝吟。

藤為時（藤原為時）（一一一四）

未飽多年詩思侵、清風朗月久沈吟。志随日動何為足、興遇晴牽豈厭心。

班扇長襟秋不尽、楚台餘味老弥深。時人莫咲散樗吏、白髮緋衫独尚淫。

この中で、則忠は「文場」と「詩境」を対として詠み、「詩境」が場所であることを示している。公任も「一時過境無俗物（一時境に過ぎるに俗物無し）」と「境」の字で道長邸を表しており、ここでの「詩境」は道長邸およびそこで行われた詩会を言う。

伊周の詩の「文路」「詞江」の語は、以言の「秋未出詩境」詩の「文峰」「詞海」に近似している。「秋未出詩境」詩は以言と紀齊名が詠んだもので、齊名は長保元（九九九）年に没しており、「秋未出詩境」詩が先行する。それにより伊周の「文路」や「詞江」の語は以言の詩を利用した可能性がある。似た例は他に『本朝文粹』大江匡衡「初冬於都督大王書齋同賦唯以詩為友応教」（二六八）にある。この詩では「文林」「詞江」の対があり、「遊詩境四十年、学鹿未自矣」と「詩境」の語も見える。これも長保元年の作であり、やはり「秋未出詩境」詩が先行する。以言の「秋未出詩境」詩については後述するが、ここでの「詩境」は「文場」つまり詩作の場として用いられているといえる。

（三） 仮想空間としての「詩境」

仮想空間としての「詩境」は以言の「秋未出詩境」詩や匡房の「詩境記」がある。

「詩境記」の「詩境」が仮想空間であるという発想は、仮想空間の「酔郷」を描いた王績の「酔郷記」によるものである。「詩境」の語については、白居易の「將至東都先寄令狐留守」詩に「詩境」と「酔郷」の対がみえ、「詩境記」はこの詩の対を利用したと考えられる。しかし、白詩の時点ではまだ「詩境」は気持ちを表す語で仮想空間としての風景は持っていない。また、「酔郷記」と「詩境記」の「郷」と「境」では字が異なっており、匡房は「酔郷記」の発想だ

けでなく「詩境」の語も他の作品から利用したと考えられる。

この字の違いについて、「詩境」と「醉郷」が対として使われている例に白居易の詩がある。

将至東都先寄令狐留守（2722） 白居易²¹

将に東都に至らんとして先づ令狐留守に寄す

黄鳥無声葉滿枝

黄鳥声無くして葉枝に滿ち

閑吟想到洛城時

閑吟の想ひ洛城の時に到る

惜逢金谷三春尽

金谷の三春尽くるに逢ふを惜しみ

恨拜銅樓一月遲

銅樓に一月遅く拜するを恨む

詩境忽来還自得

詩境忽ち来つて還自得す

醉郷潜去与誰期

醉郷潜に去つて誰と期せん

東都添箇狂賓客

東都箇の狂賓客を添へ

先報壺觴風月知

先づ壺觴風月に報じて知らしむ

「詩境」とは美しい景色や詩を作るのにふさわしい状況に遇うと起る詩を作りたくなる気持ちであった。この詩で白居易は自分は醉郷から去つたがまた洛陽で誰かと醉郷に入りたい、つまり令狐楚と一緒に酒を飲もうと誘っている。ここでの「詩境」「醉郷」は仮想空間ではなく、詩を作ったり誰かと酒を飲んだりしたい気持ちを表している。

匡房はこの詩の「醉郷」と「詩境」の対から「詩境記」を記したと考えられる。しかし、この詩の「詩境」は気持ちを表し、それに引かれた「醉郷」もそこへ入つて酔う、つまり酒を飲んで酔いたいという気持ちを表しており、「醉郷記」や「詩境記」のあらわす仮想空間ではない。

白居易の「詩境」と「醉郷」の使用例は先述の一例のみだが、「詩境」と似た語の「詩国」と「醉郷」を同時に使った詩が一例ある。

見殷堯藩侍御憶江南詩三十首、詩中多叙蘇杭盛事。余嘗典二郡。因繼和之(2638)⁽²²⁾ 白居易

殷堯藩侍御江南を憶ふ詩三十首を見るに、詩中多く蘇杭の盛事を叙せり。余嘗て二郡を典る。因て繼いで之に和す

江南名郡數蘇杭

江南の名郡蘇杭を數ふ

写在殷家三十章

写して殷家の三十章に在り

君是旅人猶苦憶

君は是れ旅人なるも猶ほ憶ふ

我爲刺史更難忘

我は刺史たれば更に忘れ難し

境牽吟詠真詩国

境は吟詠を牽く真の詩国

興入笙歌好醉郷

興は笙歌に入る好き醉郷

為念旧遊終一去

旧遊を念ふが為に終に一たび去り

扁舟直擬到滄浪

扁舟直ちに滄浪に到らんと擬す

江南地方で名郡とされるところは蘇州と杭州で、殷堯藩の江南詩三十首の中で多く詠じられている。君は旅人であったのに蘇州と杭州をよく記憶しているが、両郡の刺史であった私はそれよりもさらに忘れがたい。蘇州や杭州というところは詩を吟じたり作ったりする気持ちを引つ張り出すようなところで、つまり蘇州と杭州は真の詩国である。そこで心地よく酔っ払って笙に合わせて歌うのは楽しく、蘇州と杭州は「醉郷記」の醉郷のような場所である。かつて遊んだ蘇州や杭州を思い出したのだからもう一度そこへ行こうと思っている。

この詩では思い出として存在する蘇州と杭州の地を「詩国」「醉郷」と言い、ここも仮想空間を詠んだものではない。白居易のこの詩を利用したとされるのが次の慶滋保胤の詩序である。これは『和漢朗詠集』刺史部〔六九一〕および『本朝文粹』卷九・詩序部〔二五〇〕に載る。

春日於右監門藤將軍亭、餞能州源刺史赴任、勸醉惜別 慶滋保胤

春日右監門藤將軍亭に於いて、能州源刺史任に赴くを餞し、酔を勧めて別れを惜しむ

雖三百盃莫強辭 辺土不是醉郷 三百盃と雖も強ちに辞すること莫かれ、辺土は是れ醉郷にあらず

此一両句可重詠 北陸豈亦詩国 此の一両句は重ねて詠ずべし、北陸豈に亦た詩国ならんや

能登国は辺境の地で「醉郷記」の醉郷や白居易の詩の蘇州や杭州ではない。だから都にいる今は酒を辞すことなく、この宴で詠んだ一二句を繰り返して吟じてもらいたい。この詩は、天元二（九七九）年正月に能登守に任じられ赴任する源順に対し、別れを惜しむ席で詠まれた詩である。

「詩境」と「醉郷」の対と似た発想は、晩唐の詩人許渾の詩にも見ることが出来る。

与裴三十秀才自越西帰望亭阻凍登虎丘山寺精舎²³

裴三十秀才と越西の帰望亭より凍に阻しみ、虎丘山寺の精舎に登る

春草越呉間、心期旦夕還 春草越呉の間、心に期す旦夕に還るを

酒郷逢客病 詩境遇僧閑 酒郷客に逢ひて病み、詩境僧に遇ひて閑なり

倚棹水生浦、登楼雪満山 棹に倚るに氷浦に生じ、楼に登るに雪山に満つ

東風不可待、帰鬢坐斑斑 東風待つべからず、帰鬢坐るに斑斑

春草は越呉にあり、春草がはやく戻ってくることを期待している。客に会うと飲み過ぎて病むほどに酒を飲みたくなり、僧に会うと詩を作りたくなる。船に乗ると浦は凍っているし、楼に登ると山には雪が積もっている。氷も雪もあり、待てども春は来ず、帰ろうと思ううちにごましお頭になってしまった。

この「詩境」の使い方は白居易の「将至東都先寄令狐留守」詩と同じく、詩を作りたいたい気持ちを表している。「酒郷」は「酔郷記」の「酔郷」に由来する語と考えられるが、「酒」と「詩」でよりわかりやすい対になっている。

以上、白居易の酔郷と詩国の使用とそれを利用した詩文をみたが、いずれも仮想空間としての「詩国」ではない。白居易の「酔郷」は「酔郷記」の語を利用して、酒に酔うことを表現しており、「酔郷」が仮想空間であることは問題にしていないのである。以言の「秋未出詩境」や匡房の「詩境記」のような仮想空間の「詩境」を描いた作品はそれ以前の作品にはみられず、以言の「秋未出詩境」詩がはじまりだと考えられる。

「詩境」の語は「酔郷記」の「酔郷」に由来している。そして、その詩には「酔郷」の対として「詩境」が用いられている。白居易以前に「詩境」と「酔郷」の語を同じ作品で使用した例は管見に入らなかった。しかし、道真が利用した王績の「酔郷記」も日本でよく知られ、白詩も平安朝の詩人たちに愛好された。その白詩の「詩境」の語が「酔郷」を連想する契機となり得たのではないだろうか。そう考えると「詩境」の語は「酔郷記」を利用した白居易の詩に依るものであると考えられる。

しかし、以言は「秋未出詩境」詩で、詩題の「詩境」を仮想空間と仮定し、擬人化した秋が留まる様子を描いた。詩題の「詩境」は詩を作りたい気持ちを表す「詩境」、文場としての「詩境」の意味も併せ持つ。以言以前の「詩境」の例を見たが、そこには仮想空間は詠まれていなかった。それでは仮想空間の「詩境」の発想はどこから生まれたのだら

うか。

三 以言の「詩境」へ至る三月尽・九月尽詩

「秋未出詩境」詩の「詩境」が仮想空間であるという発想の契機はその詩が載る『和漢朗詠集』九月尽部にある。本章では以言が「詩境」を仮想空間に見立てた理由を考える。

『和漢朗詠集』九月尽部は、日本漢詩四首、和歌一首で構成され、三月尽部と対になって存在している。その部立に用いられた「三月尽」が白居易に由来するということは、平岡武夫氏、小島憲之氏によって論じられている²⁴。白居易が詠んだ「三月尽」は『和漢朗詠集』三月尽部に載る。

落花〔五〇〕

留春春不住 春婦人寂寞 春を留むるに春住まらず、春婦つて人寂寞たり
 厭風風不定 風起花蕭索 風を厭ふに風定まらず、風起こつて花蕭索たり

行く春を留めようとしても留まらず、春は去つて人もいなくなつても寂しい。花を散らす風を嫌うが、その風に乘つて花は散り、もの寂しい様子になってしまう。

春が帰ると春を擬人化し、惜春の気持ちを表している。菅野禮行氏によると、白居易の詩の特徴的な点は、季節の推移による微妙な変化の表れをいち早くとらえる敏感な感覚の表現にある²⁵。それが次の詩に現れている。

新秋喜涼〔3166〕 白居易

過得炎蒸月 尤宜老病身 炎蒸の月を過し得て、尤も老病の身に宜し

衣裳朝不潤 枕簟夜相親 衣裳朝に潤はず、枕簟夜に相親しむ

樓月織纖早 波風嫋嫋新 樓月織纖として早く、波風嫋嫋として新たなり

光陰与時節 先感是詩人 光陰と時節と、先づ感ずるは是れ詩人

白居易は自然の風物に対して鋭敏な感覚を持つ詩人で、「光陰与時節、先感是詩人」といい、その作は季節のはざまを詠う詩が多い。そして、春の終わりに惜春の想いを込めた「三月尽」詩を詠んだのである。

日本漢詩に三月尽が見えるのは九世紀後半からで、島田忠臣や菅原道真を中心とする「白詩文学享受圏」の詩人たちがいち早く摂取したと小島氏は指摘する。²⁶⁾ 三月尽是道真らによって日本に受け入れられ、さらに九月尽という我が国独自の題材に発展していった。これについては太田郁子氏の論文に詳しい。²⁷⁾ 太田氏によると中国文学では宋玉の「九弁」、それを受けて潘岳が「秋興賦」を詠んで以来、悲秋は中国の伝統的な秋の季節観であり、秋は哀惜の対象と見なされずにいた。一方、日本では『万葉集』における秋が黄葉をはじめとする自然の景物と結びついて賞され惜しまれる哀惜の対象であった。その日本漢詩は、中国的季節観の悲秋を詩的情趣の一つとして取り込みつつ、日本的季節観である惜秋をも詠むようになった。そして九月尽是三月尽と同様に季節が去っていくのを惜しむ惜秋を詠むものとして日本漢詩の題材として『和漢朗詠集』に一つの部が立てられた。

その『和漢朗詠集』の三月尽・九月尽部の詩を見ると、白詩と同じような季節の擬人化が見受けられる。季節は現実では人ではない。人に仮想された季節が去りそれを詩人が送る、そこに季節の終わりを惜しむ心が詠みこまれているのである。

『菅家文章』巻四「四年三月廿六日作」詩の中で「計四年春残日四、逢三月尽客居三」と、「三月尽」の語が用いられている。言葉だけでなく、道真は春を惜しむという白居易の三月尽の発想を詠んでおり、『和漢朗詠集』三月尽部にその例が見られる。

送春 (五三) 菅原道真

送春不用動舟車 春を送るに用ゐず舟車を動かさんことを

唯別残鶯与落花 唯だ残鶯と落花とに別る

人間ではない春を送るのに舟や車を用いる必要はない。ただ春は晩春に鳴く鶯と散りゆく春に送られて去っていくのだ。

(同右) (五四)

若使韶光知我意 若し韶光をして我が意を知らしめましかば

今宵旅宿在詩家 今宵の旅宿は詩家に在らまし

もし過ぎゆく春の光に、私の惜春の気持を知らせたならば、春が尽きる最後の一夜の宿を、季節の推移に敏感な詩人である自分のもとで過ごすだろう。

韶光は春ののどかな光や景色であり、道真はそこに惜春の想いを込めた。菅野氏はこの詩について「自然と人間とが詩文によって交流する風流な情緒を、詩人的自覚をもつて歌いあげた一例。この自覚は白居易に学んだもの」であるとい⁽²⁸⁾う。

道真は白居易に倣って去り行く春を擬人化し、その春の最後の一日の宿は、季節の推移に敏感な詩人の家だと詠んだ。詩人は季節の推移に敏感であり、過ぎゆく季節もそのような詩人のもとで最後の一日を過ごす。白居易の詩人的自覚が道真に受け継がれている。

白居易は惜春の想いを詠むのに春を擬人化した⁽²⁹⁾が、ここでの道真の句は春は人間ではないのでそれを送るのに人間の乗りものを用いないといっている。前掲の新聞氏の論文ではここで舟や車を出しているのは、王績「醉郷記」の「不知有舟車機器之用」によるとい⁽²⁹⁾う。「醉郷記」は仮想空間の「醉郷」を詠んだものであった。道真も「三月尽」日に、「若使韶光知我意、今宵旅宿在詩家（若し韶光をして我が意を知らしめましかば、今宵の旅宿は詩家に在らまし）」と、春を擬人化し、現実にはあり得ない風景を仮想している。道真が詠んだのは「醉郷記」のように風景が描かれた仮想空間ではないが、春を人に仮想している。

二章で述べたが、白詩に「醉郷」の語の利用はあるが、それは酒に酔うという意味で、「醉郷記」の「醉郷」のような仮想空間を詠んでいるわけではない。白居易は「醉郷」と「詩境」、「醉郷」と「詩国」のように詩と酒を分けて詠んでいるのである。しかし、道真は酒を詠んだ詩ではなく、詩人の元に春が留まると仮想した詩に、「醉郷記」を利用している。

次に『和漢朗詠集』に採られた橘在列の三月尽、源順の九月尽詩をみる。

三月尽 (五五) 尊敬 (橘在列)

留春不用関城固 春を留むるに用ゐず関城の固めを

花落随風鳥入雲 花は落ちて風に随ひ鳥は雲に入る

過ぎゆく春を留めるには関所や城門の固めは何の役にも立たない。花は風のまにまに落ち尽くし、鳥は雲の彼方に姿を消して鳴き声も聞こえなくなってしまう。

九月尽日於仏性院惜秋 (二七四) 源順

縦以嶠函為固 難留蕭瑟於雲衢 縦ひ嶠函を以て固めと為すとも、蕭瑟を雲衢に留め難し

縦令孟賁而追 何遮爽籟於風境 縦ひ孟賁をして追はしむとも、何ぞ爽籟を風境に遮らん

秋の最後の日である九月尽日には、たとえ嶠山や函谷関のような険しさで守り固めても、過ぎていく秋風を留めておくことはできない。また、たとえ孟賁のような勇士に追わせて秋を引き留めようと思っても、どうして秋風を風の通い路に遮り留めることができようか。

この二人は、白居易や道真の作と同様、去り行く季節を擬人化している。しかし、擬人化しても結局は季節は人ではないので留められないという。季節を留めようとして用いられているのは現実の人間世界の関城の固めである。人に仮想された季節を留めるのに、現実世界の関ではどうにもならない。そこに惜春・惜秋の想いをこめているのである。

季節が道を行き帰るといふ発想は、平安朝の詩歌によく詠まれている。在列も順も季節は道を通って帰ると考え、だ

からこそその道の途中で春や秋が去るのを阻もうとしたのである。『江談抄』の斉名の「秋未出詩境」詩にもこれと同様に季節が去る道が詠まれていた。

最後に、大江以言の九月尽詩をみる。

秋未出詩境 (二九六) 大江以言

文峰案轡白駒景 文峰に轡を案ず白駒の景

詞海艤舟紅葉声 詞海に舟を艤ふ紅葉の声

詩題の「詩境」には、詩を作りたくなる気持ちを表す「詩境」や、それによって開かれる詩会を言う文場としての「詩境」が込められている。それだけではなく、以言は「文峰」や「詞海」という仮想空間の景色を詠み込んだ。これは「酔郷記」の仮想空間の「酔郷」の描き方と類似している。つまり、以言の「秋未出詩境」詩には二章で述べた三つの「詩境」が表現されており、ここに以言の「詩境」の語の新しさが存在する。以言の「詩境」の使い方は先行する詩を利用しながら、そこから新しい発想を生み出したと言える。

以上、以言の「詩境」の語の特徴について考察した。

二章で述べた文場としての「詩境」や仮想空間としての「詩境」は、中国の詩にそのような「詩境」の用例は見出せず、本朝独自の発想の可能性が高い。しかし、本稿では以言詩の「詩境」を「酔郷記」の「酔郷」のような仮想空間と

仮定し、そこから「詩境」の語について考察したため、「詩境」の語は僅かな用例を挙げるに留まっている。中国の詩の「詩境」についても論ずる必要がある。

以言の詩についても「詩境」の語を中心に考えたため、大きく以言の詩の特徴を論ずるに至らなかった。しかし、「秋未出詩境」詩における「詩境」は、白詩の語を利用しながらも、九月尽という題材と組み合わせることで新たな展開を見せることとなった。「詩境」の語も、九月尽の題材も、以言は先の詩人たちの発想を吸収し、それらを発展させた。そして、その発想は匡房に受け継がれ、「詩境記」や『江談抄』の以言の「秋未出詩境」詩の評に繋がっていった。

注

- (1) 後藤昭雄「大江以言考」(『平安朝漢文学論考補訂版』勉誠出版・平成十七年二月、初出は『平安文学研究』第四十
八・平安文学研究会・昭和四十七年六月)である。)、田中新一「大江以言についての覚書―『江談抄』の資料的価値
―」(『国語国文学』第四十九集、平成三年三月)。
- (2) 後藤昭雄「大江匡房『詩境記』私注」(『中古文学と漢文学Ⅱ』和漢比較文学叢書四・汲古書院・昭和六十二年二月)。
なお、後藤氏は「詩境記」に先行する作品として「秋未出詩境」詩もあげておられる。
- (3) 注(2)参照。「詩境記」および「醉郷記」の引用は同論文による。
- (4) 後藤昭雄・田口和夫・仁平道明・根津義『類聚本系江談抄注解』(武蔵野書院・昭和五十八年)。引用に際しては、一
部の字句を改めた。
- (5) このことは小野泰央「朗詠」「三月尽」所収「留春不用関城固」について―橘在列小論―(『中央大学国文』第三十九
号平成八年六月)および、北山円正「源氏物語」の九月尽―光源氏と空蟬の別れ―(『白居易研究年報』第八号・平

- 成十九年九月)で論じられている。
- (6) これについては三章で論じる。
- (7) 菅野禮行『和漢朗詠集』(新編日本古典文学全集19・小学館・平成十二年)以下、『和漢朗詠集』の引用及び作品番号は同書による。
- (8) 新間一美「白居易と菅原道真の三月尺詩について―「送春」の表現―」(『女子大國文』第百四十八号・平成二十三年一月)。新間氏は道真の「醉郷」の例が三例(二七五・三七三・三八九)あると注記している。「賦葉落庭柯空」(三七三)詩には「新賓詩秋積、逆旅醉郷逢」の対句がある。
- (9) 岡村繁『白氏文集 九』(新釈漢文大系105・明治書院・平成十七年)、訳注は藤井良雄氏による。以下、白居易の作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店・昭和三十五年)「綜合作品表」により、算用数字で記す。また、本文中の詩文の訓読は各参考文献を参考にし私による。
- (10) 川口久雄『菅家文章・菅家後集』(日本古典文学大系72・岩波書店・昭和四十一年)以下、菅家文章および菅家後集の引用は同書により、番号も同書のものを出す。
- (11) 新間一美「白居易の詩人意識と菅家文章・古今序―詩魔・詩仙・和歌ノ仙―」(『平安朝文学と漢詩文』和泉書院・平成十五年二月、初出『和漢比較文学』十七号・平成八年八月)。
- (12) 岡村繁『白氏文集 三』(新釈漢文大系99・明治書院・昭和六十三年) 訳注は竹村則行氏による。
- (13) 岡村繁『白氏文集 九』注(9)参照。
- (14) 『菅家文章』「戊子之歳、八月十五夜陪月台各分一字。探得登」(三〇)。
- (15) 川口久雄・本朝麗藻を詠む会『本朝麗藻簡注』(勉誠社・平成五年九月)以下、本朝麗藻の引用および作品番号は同書による。この詩の詩題は「夏日同賦未飽風月思」。
- (16) 佐久節『白楽天全詩集三』(統国訳漢文大成・日本図書センター・昭和五十三年復刻)。
- (17) 柿村重松『本朝文粹註釈』(内外出版印刷株式会社・大正十一年・昭和五年再発行)。以下『本朝文粹』の引用は同書

により、大曾根章介・金原理・後藤昭雄『本朝文粹』（新日本古典文学大系27・岩波書店・平成四年五月）の通し番号を付す。

- (18) 『本朝文粹』「暮春陪上州大王池亭同賦度水落花来各分一字応教」〔三〇七〕。
 (19) 『本朝文粹』「初冬翫紅葉応太上法皇製」〔三一〇〕。
 (20) 前掲。注(15)参照。
 (21) 前掲。注(16)参照。
 (22) 岡村繁『白氏文集九』。注(9)参照。
 (23) 『全唐詩』卷五百三十。(『全唐詩』第十六冊・中華書局。一九六〇年)。
 (24) 平岡武夫「三月盡—白詩歳時記—」(『研究紀要』第十八号、日本大学人文科学研究所、昭和五十一年三月)、小島憲之「四季語を通して—「尽日」の誕生—」(『国語国文』第四十卷第一号、昭和五十二年一月)。
 (25) 白居易の詩人意識については新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』の菅野氏の解説(四二七頁)参照。
 (26) 注(24)の小島論文参照。
 (27) 太田郁子「『和漢朗詠集』の「三月尽」・「九月尽」」(『国文学 言語と文芸』九一号、昭和五十六年三月)
 (28) 新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』〔五四〕注参照。
 (29) 注(8)の新聞論文参照。